

## 基礎看護学教育における講義前の看護過程に対する学生の思い

新山悦子\*<sup>1</sup> 島田三鈴\*<sup>1</sup>

### はじめに

医療の高度化，専門化に伴い，看護師には科学的で適切な看護問題解決能力が求められている．個別的で専門性の高い看護の提供するために有効なツールとして，看護過程が看護師教育の中に位置づけられている．近年の学生は，生活体験が少なく，問題解決能力が低下していることが指摘されている<sup>1)</sup>．さらに基礎看護学は，1～2年次生に教授するため，専門科目が履修途中であり，看護過程を教授することは難しい．

この看護における問題解決能力を育成するために，B大学でも看護過程の講義，演習を実施している．さらに基礎看護学実習Ⅱにおいて看護過程を使った実習を展開しているが，学生から「難しい」「どうしたらよいかかわからない」といった声が聞かれ，看護過程を展開する上での困難がみられる．成瀬は<sup>2)</sup>，1年次生の看護学生96名を対象に看護過程の授業後に質問紙調査を実施し，多くの知識を統合する看護過程は学生にとって難易度の高い学習内容であること，また学習に難しさが重なったり，達成感が少ないと学生の意欲の低下や悩みの増加につながることを指摘している．そのため，看護過程を学習する前の思いやイメージ，不安などを明らかにし，学生の思いに沿った講義・演習を行い，教授目的が達成できるような教授法を実施することが求められる．しかしこれら看護過程の研究は，看護過程の講義・演習後，実習終了後に量的に分析した研究や，実習記録から分析した研究がほとんどあり<sup>3-6)</sup>，講義前に質的に学生の思いやイメージを明らかにした研究は見当たらない．

そこで本研究は，基礎看護学教育において基礎看護技術を習得し，B大学の2年次生が看護を展開する上で必要な基礎看護教育内容を統合する科目である看護過程の講義・演習を受ける学生の思いやイメージを知り，学生が理解しやすい看護過程の教授法を検討するための基礎資料とすることを目的とした．

### 方 法

#### 1．対象

対象者は，A県のB大学に在籍している保健看護学科2年次生64名である．

#### 2．研究デザイン

研究デザインは，質的帰納的研究法である．

#### 3．調査実施時期

調査実施時期は，2006年10月に行った．

#### 4．調査方法

調査方法は，自由記述による無記名の質問紙調査である．調査は，授業評価を行なわない調査者が調査を実施し，回収をした．また回収は，その場で回収することに同意する学生のみ回収箱に入れてもらった．後日に提出したい者は，調査者のメールボックスに置いてある封筒内に入れてもらうよう，学生と相談して決定し，同意を得た．

#### 5．質問紙の内容

質問は，以下の内容である．

「看護過程について何でもかまいません．自由にお書きください．(知っていること，看護過程に対するイメージ，看護過程に対するあなたの思いや感情，その他，何でも思いのままを書いてください．)」

#### 6．分析方法

分析対象者は，全数である64名(回収率100%)であった．データ分析方法は，まず研究者が自由記述の回答から単文を1記述単位とし，内容に沿ってコード化した．そしてコードは，研究者2名が意味内容の類似性によってコードを集め，その集合したコードの本質が明らかになるまで内容を読み返し統合するという一連の作業を繰り返してカテゴリー化し，サブカテゴリーとした．さらに意味内容の関連のあるものをまとめて抽象化し，看護学生の看護過程に対する思いの項目とした．分析の全過程は，複数の看護学専攻の研究者で行い，スーパービジョンを受けた．これらの分析過程において，分類の適切性，およびカテゴリー表現の適切性について繰り返

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科  
(連絡先)新山悦子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-Mail: niiyama@mw.kawasaki-m.ac.jp

し検討し、洗練性を高めた。妥当性・信頼性は、最終的に明らかになったカテゴリー名や研究結果が妥当であることを確認し、結果の信頼性を確保した。さらにそして思い項目およびサブカテゴリーの当該コード件数を算出し、思い項目はコード件数の割合（記載率）を算出した。

#### 7.用語の定義

看護過程：看護過程とは、看護の知識体系に基づいて、対象の看護上の問題を明確にし、計画的に看護を実践・評価する系統的・組織的な活動であり、科学的思考過程である<sup>7)</sup>。アセスメント、看護診断（ニーズおよび問題の把握と分析）、計画、実施、評価という5つのステップから構成される。

#### 8.倫理的配慮

調査方法は、調査の目的と方法について各々の対象者に口頭と文書で十分に説明し、了解を得た。回答は無記名、自由意志であり、回答しなくても不利益を被らないこと、調査の途中でやめてもよいこと、データ分析は単位認定後に行うことにより成績評価には全く影響しないこと、研究後に調査者が責任を持って破棄することなどを口頭と紙面上で説明した。さらに調査は、授業評価を行わない調査者が調査を実施し、回収をした。

回収は、その場で回収することに同意する学生のみ回収箱に入れてもらった。後日に提出したい者は、調査者のメールボックスに置いてある封筒内に入れてもらうよう、学生と相談して決定した。その結果、64名全員の同意が得られた。また研究参加の意思変更の申し出ができるよう1年間の猶予期間を設けた。

#### 9. B大学の講義形式

B大学の基礎看護学の教育は、大きく3回に分けて実施している。1年次生秋期には、対象の日常生活援助の看護技術について90時間の講義・演習を実施している。また2年次生春期には、診療の補助業務を中心とした看護技術について90時間の講義・演習を実施している。2年次生秋期には、看護過程を

60時間かけて講義・演習を実施している。本研究の対象である看護学生は、1年次生秋期に看護過程概論を1コマ受講しており、2年次生後期から看護過程について半期をかけて講義・演習を受講する。したがって調査は、看護過程概論を90分間受講後、1年経過した時期であり、また2年次生秋期の看護過程講義開講直後に実施した。

## 結 果

有効回答者64名（男性5名、女性59名）を分析対象者とした。表1は、分析対象者64名の看護過程に対する思いをカテゴリー化した結果である。以下、カテゴリー：【 】,サブカテゴリー：《 》,コード：「 」で示す。

看護学生の看護過程に対する思いは、「難しそう」「ケア計画を立て、実施・評価する過程」などの193件のコードが抽出され、7カテゴリー、4サブカテゴリーが抽出された。また看護学生の看護過程に対する思いは、「患者様1人ひとりに合ったケアプランを計画すること」等からなる【個別のイメージ】(12件)、「どうしたら良い看護を行えるかを考えながら学んでいきたいと思う」等からなる【学習的側面からの現状と展望】(17件)、「ケア計画を立て、実施・評価をする過程」等からなる【看護の一連の過程】(20件)、「難しそう」「どう計画・展開するか難しいというイメージ」等からなる【困難なイメージ】(27件)、「看護過程は重要なもの」等からなる【看護過程の意義】(38件)、「看護師の知識・観察力が大切になる」「思いやりが大切」等からなる【看護過程のために必要な知識・技術・態度】(39件)、「ケアの方法」「看護を行っていく順序を立てて考えたもの」等からなる【道具的イメージ】(40件)から構成されていた。さらに【看護過程の意義】(38件)は、《よりよい看護のために不可欠なもの》(32件)《記録と関連した意義》(6件)から、【道具的イメージ】(40件)は《思考的道具》(9件)《実践的道具》(31件)から構成されていた。

表1 看護学生における看護過程に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード件数
個別のイメージ		12
学習的側面からの現状と展望		17
看護の一連の過程		20
困難なイメージ		27
看護過程の意義	a.記録と関連した意義	6
	b.よりよい看護のために不可欠なもの	32
看護過程のために必要な知識・技術・態度		39
道具的イメージ	a.思考的道具	9
	b.実践的道具	31

a)カテゴリーはコード件数の降順

## 考 察

本研究は、B大学の保健看護学科の学生を対象に、看護過程に対する思いを明らかにし、学生が理解しやすい看護過程の教授法を検討するための基礎資料とすることであった。以下、各カテゴリー、看護過程の教授法の課題について述べる。

B大学の看護学生は看護過程に対して、「患者1人1人に適応したケアを実施するためのプロセス」であると【個別的イメージ】を持っていた。また「患者さん1人1人性格や症状、ケア方法も違うし、自分が一番側で展開していくことだから、丁寧にしたい」と今後の自己の課題についても述べられていた。さらに学生は、「色々な職種の人と話し合っ、患者さん一人ひとりに合った看護、ケアを展開していくこと」と、看護師が他職種との連携の中で個性のある看護を提供するために行うものであると思っていた。

また学生は、「具体的にどうやって使うのかと疑問に思った」と現在はわからないが、「根拠・理由がしっかりしたものでなければならない」と看護過程が科学的思考に基づいた根拠のあるものであると思っていた。さらに「患者だけではなく、家族の看護もしていきたい」と第2の患者と言われる家族を含めて看護を実践していきたいと思っていた。学生は、看護過程が看護を提供する際のツールであるという【道具的イメージ】を持っていた。さらに学生は、看護過程は「入院中は、苦痛(精神的・身体的)のない生活をしてもらえるよう工夫して考える《思想的道具》であり、また学生は、「患者のアセスメントをして、どのような看護が必要なかを考える手段」である《実践的道具》だと思っていた。【看護過程の意義】は、学生が「看護過程は、とても看護をするためには重要である」と思っていたように《よりよい看護のために不可欠なもの》である。また「看護過程の記録をみると患者さんの状態や情報が全て分かる」といった《記録と関連した意義》を持つと思っていた。これは基礎看護学実習Iにおいて病棟の看護記録をみていることが影響していると考え。看護過程の本質、意義は、患者に合った看護を提供することにある。そしてその基本は、「看護師の知識・観察力が大切になる」「思いやりが大切」等からなる【看護過程のために必要な知識・技術・態度】であると思っていた。

学生は、1年次に看護過程の概論を90分間受講しており、「ケア計画を立て、実施・評価をする過程」「フィードバックし、何度も繰り返されるもの」と【看護の一連の過程】であると思っていた。看護過

程では、情報収集、アセスメント、看護問題の抽出、看護計画の立案、実施、評価の一連の流れで行う。看護師は、この一連の流れを繰り返し行うことで、患者に合ったより良い看護が提供できる。学生は、この看護過程の流れについては理解できていることが確認できた。

学生は、「どうしたら良い看護を行えるかを考えながら学んでいきたい」と看護過程を学ぶことに対する展望を記載していた。そして「その患者さんに最も適切な対応を行えるようになりたい」「実際の状況に直面していると意識して取り組まないと、実習などで使うのに苦労しそうな感じ」と【学習的側面からの現状と展望】についての思いが述べられていた。看護学生は、看護過程を学び、その後の基礎看護学実習IIにおいて自分で看護過程が展開できるよう、自己の課題が見出せ、学習意欲に繋がっていたことが確認できた。

学生は「難しそう」「これから自分で看護計画ができるか不安」「意味も内容も理解できていない」「どう計画・展開するか難しいというイメージ」等、【困難なイメージ】であると思っていた。青木らは、看護学生を対象に看護過程の講義・演習後、基礎看護学実習後に質問紙調査を実施し、いずれの時期にも看護過程の情報収集から評価・修正までの各ステップほぼ全てにおいて困難を感じていることを報告している<sup>8)</sup>。今回、対象とした学生は1年次に看護過程の概論において看護過程とは何か、看護過程を行う意義、看護過程の各ステップについて学んでいる。その時に学生は、まだ病院実習を行っていないため、疾病や障害を持つ患者を看護したことがない。また専門科目の学習も行っていないため、知識の活用ができず、看護過程を学ぶ前から困難感を持っていることが明らかになった。

以上、看護学生は看護過程に対して【個別的イメージ】【看護の一連の過程】【看護過程の意義】【看護過程のために必要な知識・技術・態度】【道具的イメージ】であると思っており、これは1年次の概論の受講が影響していると推察された。また【困難なイメージ】【学習的側面からの現状と展望】は、講義・演習後、基礎看護学実習IIの後に質問紙調査を実施し、継続して学生の成長を確認し、評価、改善しながら講義・演習を行うことが課題である。

以上のことから看護過程の教授法は、学生が看護過程の講義開始時より難しいと思っているため、理解しやすい事例で展開すること、看護過程と看護実践を結び付けられるよう、各ステップを丁寧に指導すること、演習は教員の指導を受けながら実際に展開する時間を長く取ること、ロールプレイを導入し

て知識と技術の統合を図っていくことが求められる。

本研究の限界は、A 県の B 大学保健看護学科の学生という限定した地域における対象の結果であり、一般化するのには慎重を要する。しかし今まで焦点が当てられてこなかった看護過程の講義前において看護学生の看護過程に対する思いに着目し、思いの記述から学生のレディネスに沿った教育を行う基礎資料とし、教授法の課題を明らかにしたことは意義があると考えられる。今後、本研究の結果、課題を踏まえて講義・演習計画を立案し、講義・演習後、看護過程を使った看護の実践を学ぶ基礎看護学実習 II 終了後の看護過程に対する思いを明らかにし、講義・演習の評価を行うこと、地域を広げて対象者数を増やし、結果の一般化を図ることが課題である。

### 結 論

- 1) 講義・演習前における看護過程に対する看護学生の思いは、193枚のコードが抽出され、7 カテゴリー、4 サブカテゴリーが抽出された。
- 2) 看護学生の看護過程に対する思いは、【個別

のイメージ】【学習的側面からの現状と展望】【看護の一連の過程】【困難なイメージ】【看護過程の意義】【看護過程のために必要な知識・技術・態度】【道具的イメージ】から構成されていた。

- 3) 【看護過程の意義】は、「よりよい看護のために不可欠なもの」《記録と関連した意義》から、【道具的イメージ】は《思考的道具》《実践的道具》から構成されていた。
- 4) 看護過程の教授法は、理解しやすい事例で展開すること、看護過程と看護実践を結び付けられるよう、各ステップを丁寧に指導すること、演習は教員の指導を受けながら実際に展開する時間を長く取ること、ロールプレイを導入して知識と技術の統合を図っていくことが求められる。

本調査に際し、研究趣旨をご理解いただき、ご協力くださいました B 大学保健看護学科の学生の皆様に深謝致します。

### 文 献

- 1) 早川みつほ, 長岡美穂, 茂木光代: クリティカルシンキングを育てるには —看護過程の授業前・後・基礎看護学実習後のアンケートを通して—, 神奈川県立看護専門学校紀要, 3, 25-33, 2004.
- 2) 森本美佐, 林真由美: 基礎看護学教育における授業改善への試み —ゼミ形式による「看護過程」の授業の実際と評価—, ナースエデュケーション, 2(5), 47-53, 2001.
- 3) 宮口恵美子, 若宮ミツエ, 菅谷しづ子: 心筋梗塞患者の事例を用いたロイの看護過程の展開 —グループ毎のアンケート調査を比較して—, 看護教育の研究, 18, 197-203, 2002.
- 4) 落合秀香, 中島明美, 小熊敦子, 小池克夫: 基礎看護実習の学生が遭遇する困難について —看護過程の展開をとおしての分析—, 東京都衛生学会誌, 101, 38-19, 1998.
- 5) 細江悟子, 山下久美子: 看護過程展開の困難に関する学生の認識, 看護教育の研究, 17, 101-111, 2000.
- 6) 片岡智子, 林智子, 石井八重子: 基礎看護学実習 II の振り返り —「看護過程」の学習過程を学生の実習記録から分析して—, 三重看護学誌, 3(1), 123-132, 2000.
- 7) 日本看護科学学会看護学術用語検討委員会報告: 日本看護科学学会誌, 14(4), 68, 1995.
- 8) 青木光子, 相原ひろみ, 徳永なみじ, 岡田ルリ子: 看護過程の展開における学生の困難 —講義・演習終了後と実習終了後の分析より—, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 16, 55-61, 2003.

(平成19年11月30日受理)

**Students Thoughts Concerning the Nursing Process  
before Receiving Basic Nursing Training**

Etsuko NIIYAMA and Misuzu SHIMADA

(Accepted Nov. 30, 2007)

Key words : basic science of nursing, nursing process, readiness

Correspondence to : Etsuko NIIYAMA

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-Mail: [niiyama@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:niiyama@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.17, No.2, 2008 431-435)